



平成 27 年 4 月 15 日 発行 第 17 号

目 次

巻頭言

副会長 私見

寺池 尚孝 …… 1

陶芸家のひとりごと

楽しく作陶

谷口 正典 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

五条坂で土をひねる楽しみ

増田 淳三 …… 3

私の作品自慢

想いを託す

和田 真理子 …… 7

陶芸技術ノート

ロクロ成形 ～ 発想を変えて ～

市川 博一 …… 10

枯渇していく原土

泉 孝之 …… 12

展覧会見聞録

作品展に初めて参加して

玄 平 …… 13

活動報告

会員便り

編集後記

付録 会報 投稿のしおり …… 18

編集委員会

委員長 森田 隆司

委員 片岡 俊彦 曾根 恭子 稲垣 薫

巻頭言

副会長 私見

副会長 寺池尚孝

昨年末、諸事情の為、森田隆司前会長が2月総会をもって退任されることを表明され、本年度は今井眞正氏が会長を務められることとなりました。森田様、3年間お疲れ様でした。また今井様、会長をお引き受け下さり、ありがとうございます。引き続き、私は副会長という立場で今井会長を補佐していきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

今年度、初代会長の再任ということで、大船に乗った気ではありますが、『京都・やきもの倶楽部』は、今とても大切な転換点を迎えようとしているのではないかと思います。結成当初は、皆のモチベーションも高く、活気に満ちあふれていました。ホテルグランヴィア京都で開催された総会・作品品評会では地方からも多くの皆様にご参集頂き、盛大に執り行なうことが出来ました。しかし、今年2月の総会では委任状出席が大半で、会員の方の出席者は10名を切り、寂しさを感じました。ここ2年間を見ましても、会員の皆様が積極的に運営にも参加して、展覧会の開催も盛大に行われていたことを想いますと、驚きもひとしおです。

このような状況の中で、改めて事業を見直してみますと、会員の中で作品を作っておられない方への配慮が欠けていたのではないかと感じております。というのは、この倶楽部に所属されている方が皆、作品を製作・展示出来る方だけでは無いということが、私の中では完全に欠落しておりました。

全会員の意見を、会の運営に反映させるのは難しいことですが、多くの会員の皆様の意見をお聞きして、皆で楽しみ、盛り上げていける会にしていきたいと思っておりますので、何か御意見がございましたら、役員の方までご連絡頂ければ幸いです。実現可能なことばかりだと小さくまとまってしまうので、実現不可能かと思われることも、どんどんご意見を頂戴出来ればと思います。

また、出来るだけ多くの方に足をお運び頂けるよう、体験・見学イベントの開催や、総会の時期に展示会を開催することなども検討出来ればと思っています。

皆で力を合わせ、『京都・やきもの倶楽部』を盛り上げていきましょう！！

陶芸家のひとりごと

楽しく作陶

陶芸家 谷口 正典

昨年、清水焼の郷会館で開催されたやきもの倶楽部作品展で出品作品の解説をさせていただき、わたくし自身非常に刺激になりました。会員の皆様の作品を解説する前に一通り拝見しましたが、それぞれの作品が楽しんで作られていることに気付き、本来、作品制作はいかに楽しく作れるかが大事だと改めて思いました。

私が大学で陶芸を学んでいるとき、清水焼団地の陶房では、陶芸教室が開かれていました。父親から「手伝って勉強なさい」と言われ、月に2回の教室を手伝いました。当時は生徒さんが30名位おられ、大変賑わっていました。生徒の皆さんが思い思いの作品を作られる中、「先生これどうやって作ったらいんですか？」という質問が山ほどあり、戸惑うばかりでした。月に2回の教室が正直怖かったです。自由な作品を創るのは楽しいと思いますが、指導する立場になると非常に難しい事を痛感いたしました。

私もまだその当時は技術がなく、指導することができずに兄弟子に任せっきりでした。陶芸の技術を学ぶには何十年もかかり経験が必要なのはわかっていましたが、これほど難しいとは思っても

いませんでした。それでも、その経験があったお陰で早く技術を身に着けることができ、今では感謝しております。人に指導をするという事は、精神的な面と技術的な面、両面が充実してなければならず、それでなければ指導など出来ないことを学びました。

現在は、日本新工芸への出品に向けて制作致しておりますが、楽しく作れるどころか悩んでばかりです。これから春から秋に向けて日展の制作もしないといけないのに、いまだに苦悩いたしております。

私の作品のテーマは、さまざまな日本の自然の風景、山、空、雲、花を釉薬で作品に表現することですが、自然の色には絶対に勝てないと思っています。色々な釉薬を研究し、少しでも自然の色に近づくことができればと思って日々研究を重ねております。

下の写真は日展に出品した作品「華のしずく」ですが、これを制作する過程で釉薬を施した状態を撮影したものがその次の写真です。色々な釉薬を試していると調合が複雑になり、何種類もの釉薬ができ、吹き付けているときに何処に何を吹き付けたのか分からなくなったりする時があり、無難な釉薬で逃げることもあります。



「華のしずく」 日展出品作品



施釉した後の「華のしずく」

こういう時こそ楽しく仕事ができれば落ち着いて出来ると思うのですが、なかなか思い通りにはならない事ばかりです。

そんな中、10年前になりますが、飛騨高山に登り窯の監修に携わることができ、年に一回焼成出来る機会を与えていただきました。焼き物の原点である薪窯に挑戦することにより、本来の自然の釉薬を経験し、現在扱っている釉薬と対比し試行錯誤しながら、新しい作品の制作をいたしております。



飛騨高山の登り窯
吹き出す黒煙、炎の緋色が映える。



飛騨高山の登り窯
薪を投げ入れ、火の勢いを見る。

陶芸道中いざ凝り気

五条坂で土をひねる楽しみ

会員 増田 淳三

京・五条坂から清水茶わん坂にかけては、今も昔も焼き物屋さん通り、大方の拠点が清水団地に移行したとはいえ、訪れる人々にはなじみが深い町だ。五条通があのように広がったのは、終戦の年の春、町の延焼防止目的で五条通り、堀川通り、御池通りが一斉に強制疎開されたことによる。私の家も小学校の運動場に隣接していたが、同じ目的で強制疎開に遭遇、あっという間に家は壊された。そして戦後、跡地は畑となり食糧難を補ったが、その頃の子供の遊びの一つに、瓦礫から拾った2枚の戸板をT字型にし、底に戸車を付けて坂道を走り下りる事がはやった。その格好の坂道はアスファルトで舗装されていた元の五条坂であった。つまり、東山から鴨川まで一気に滑り降りるのである。陶器屋さんには迷惑な悪童どもながら、そこに茶碗屋が並んでいることはよく判った。

その後、中学の先生が“土をひねっています”と言うのを聞いたが、意味がわからず、それが陶芸と知るのは後のことである。高校の先輩クラスの卒業祝いに個人名入りの湯飲みを送ろうと言うことになり、馬町あたりの陶器屋さんに飛び込んで100個ほど個人名入りの湯飲みをお願いしたら、ヨッシャヨッシャと陶工さんに気軽に焼いてもらったが、今頃、清水焼でそんなことお願いしたら高価なものになるだろうとおもう。当時はそれ程、清水焼も身近にあったと言うことであろう。

会社に入り、真空関連の仕事をしたが、酸化アルミニウム (Al_2O_3) を 1650 °C で焼成していた。アルミナはこれぐらいの温度で固まることを知った。当時、京セラ (松風碍子がルーツ)、村田製作所、ロームなどがセラミック材を基に電子部品を作り始めたが、それは京都に既に存在していた陶器、磁器の製造ノウハウ、原料や焼成炉、培った技術などインフラが揃っていたからではないかと思う。

さて、数十年を経て陶芸を習う機会を得、やっと土ひねりなるものに出会えた 2000 年の頃である。東山五条の藤平陶芸でお世話になることになったが、坂すべりに来ていたことを思うと懐かしい。工場内には現存する数少ない登り窯 (現、京都市の所有) が有り、排煙規制で市内の登り窯の使用が禁止された頃そのままに、使い残しの薪、半分窯出しした陶器、まるで時間が止まったポンペイ遺跡の様だ。庭には二宮尊徳像 (写真 1)、戦時中ロケット秋水の燃料を作った反応釜 (写真 2)、



写真 1 京焼 二宮さん



写真 2 京焼 反応窯

陶器製の手榴弾外套など、当時の京都の陶器技術が茶碗や花瓶のみならず、様々なところで生きてきた証が有る。さらに、これらが近代産業の基になり発展した事を考えると誠に興味深い。

このころ故藤平伸先生 (元京都芸大名誉教授) が同じ場所で創作をしておられた。色々お聞きするに、お若いころは清水六兵衛氏と日夜釉薬の創作を競われたそうである。この地は多くの陶器屋さんが、同じものを大量に作るのではなく、お互いに個性を生かしながら、造形や釉薬の色まで互いに競い合い、切磋琢磨することによって今日の京焼が成り立っているのだと、素人ながら思う。

陶芸を習い始め、茶碗、湯飲み、干支など好きな事を始めさせて頂いたが、今一つ京焼とは何かという疑問に突き当たった。備前なら、素人でも備前だと判り、九谷も絵付けを見れば多少とも九谷と見当が付く、しかし京焼は正直、何が京焼なのか判らない。煌びやかな茶碗もあればシンプルに呉須でしゃらしゃらと書いた焼き物もある。師匠に、京焼って何ですかと問うと。そうやね、例えば備前などは風情を楽しむが、京焼は其々作家が個性あるものを作ることではないかな。お茶や華道向けのもあるし、中には琳派の流れをくむ絵付けもある。原則自由と違うかな。

成るほど、そういえば、仕事で各地に行くが、其々の地域には未だに城が聳え、殿の教えも連綿として伝わり、そこには伝統産業の技法も継承されている。思えば京都には城もなく殿の教えもない。それぞれが勝手にやってきた土壌があるのか

もしれないと思う。だから、京焼には、こうでなければという規約が無い、勝手に作ればいいのだと言う事らしい。

さて、諸先輩と同様に、茶碗や身近な器作りを楽しんでいたが、その内、アマコンなるコンペがあることを知り、腕試しに応募しようということになった。教室内の 2~3 の生徒が応募目的で創作することになった。やはり目標があると、何かを創ろうと工夫する励みになり、其々が全く違う方法で作品を作り出したのも懐かしい。わたしの作品は香炉で、外周に組香の模様を凸状に出すため、撥水で組香を書き、後で周辺をスポンジで掻き落として何とか実現、つまみにフクロウを微細加工して作った。幸いにも入選を頂いて喜んだ。(写真 3)



写真 3 「香炉」アマコン 入選

しかし、受賞作品を拝見すると、形や絵付けのどれをとっても、ユニークで完成度が高く驚いた。当方にそのような発想や絵付け才能はなく、どうにもならんなど、落胆と挑戦意欲が交錯した。

その内、夏に風鈴を作るということになった、風鈴の涼しげな音色は、硬い磁器から出る事は判ったが、もしかして薄さも関係するのではと思い薄い磁器を作り始めた。しかし薄い磁器は水分を含むと直ぐにぐにやぐにやで誠に作りにくい。師匠の話によると、薄い磁器は乾いてから削り出すらしい。削りなしで何とか薄い磁器が作れないかと試行錯

誤する中、土を 3 ミリほどの球形にしてこれを押しつぶしてみると、非常に薄い円盤が出来た、これを積み重ねれば薄い造形物も可能ではないか。まず土台を作り、その上に円盤を垂直に半分ずつ積み重ねて行くと何とか極薄の磁器製風鈴が出来上がった。表面は鱗状であり見てくれは良くないが厚さ 1 ミリ程の風鈴が出来上がり、良い音色が聞けた。

師匠曰く、あまり誰もやってない方法だがサイズを拡大してみたらと言う助言もあり、少し大きく積み上げ、円柱形のオブジェを作り、「防人の詩」として翌年のアマコンに応募したら有り難いことに佳作を頂いた。(写真 4)



写真 4 「防人の詩」アマコン 佳作

このような造形物は普通に土を積み上げてもできるが、違いは手間がやたらかかる事と軽いことである。手間は、およそ 1000 枚以上の小片を張り付けなければならず、時間がかかる。一方、確かに重量は軽く、会場に搬入した時、受け取った人には「あれっ」と驚いてもらったが、造形物を持ち運びすることは無く、軽いと言ってみたところで、見た目には判らない。ただ、薄いらしいけど、どうして作ったのかと言う点に興味をもって貰えたのかもしれない。でも作り手は、不思議なもので、こんなやり方は手間がかかりプロはやらんと言われると、もしかしてユニークかもと勘違いして、それに精進をしてみたいと言う思いに駆られた。

そんな経過でこの方法を自身のライフワークとして専念することにした。そうすると、次に、ではどんな造形物を作るかが課題になる。一つは少し大きな物への挑戦であり、もう一つはこの方法の特長を生かせる形状の創出である。何度かアマコンに続けて応募したが入選はするけれど、自身も今一つ驚く作品は出来なかった。そこで少し大きくしてみようと高さ 50 センチで少し複雑な形状に取り組みはじめた、アマコン最後の年であった。ところが、取り組み始めると、複雑な形状は乾燥具合が違くと亀裂を生じ、それを修正すれば更なる亀裂を誘発し、ならばと霧吹きで全体を湿らすと今度は全体が変形した。修正しようと裏から押し出したら見事に崩壊し出品は断念せざるを得なかった。学んだことは複雑な形状は乾燥時の収縮が均等化されず亀裂が入る事、全体に湿らして形を整えるなどは、ありえない事などと学習した。解決方法としては円形に近いオブジェであれば収縮が均等化される。また、積み上げによる下部の重量負荷は、下部をある程度乾燥してから上部の積み上げをすれば十分に耐えられる事が判り工法の確立が進んだ。その後アマコンが終了してしまい目標を失ったが、調べると京都市にアートギャラリーなるコンペがあることを知り応募した。このコンペは主として城陽市民を対象としているが、京都府民も参加できる。絵画や工芸、書など幅広いジャンルで応募がある。図らずも応募作品は文化パーク城陽賞をいただいた。(写真 5)



写真 5 城陽アートギャラリー
文化パーク城陽賞

陶芸の審査は川上力三先生で、あまり見た事が無い技法で丁寧に仕上げてあるとご講評いただいた。小片は 2 千枚以上要したが、よくも本焼きに耐えてくれたと思う。残念なことに、この展示会は大雨の浸水により 2 年間閉鎖となった。

さて、その間、有り難いことに京都・やきもの倶楽部の作品展が始まった。2 回目の昨年、応募した作品「連奏」にて清水焼の郷賞を頂いた。(写真 6) 実はこの作品、本来円である部分が、本焼き中に変形してしまった。そこが残念と図星のご指摘をいただいた。“薄く”に囚われ、本焼中の重みによる変形を予測できなかったのである。まだまだ道は遠い。次回は思い切って厚みを増して対策を立てたい。



写真 6 「連奏」
京都・やきもの倶楽部 作品展
清水焼の郷賞 受賞

同時にこの作品展で展示頂いた「磁器行燈」では磁器を極端に薄くして光の透過を試みた。(写真 7)。しかし、相当薄くしたつもりながら、それこそ夜明けの行燈状態でボ～としか光透過しない。これでは行燈にもならないがもう少し挑戦してみようと思う。しかし、光の透過率が良い磁器土が最近出来たとかでこの工法による行燈制作も何れ不要なものになるかもしれない。

このようなことで、いささかユニークな工法を編み出したものの、問題はそれで何をつくるのか、何を表現したいのかという、肝心なところはこれ

からである。一歩ずつながら、これからはそこに集中してみたいと思う。



写真 7 「磁器行燈」

ご指導頂く京都・やきもの倶楽部の先生方の作風は全て個性的で多彩である。展示会や賛助作品を拝見するにつけ、この作品はどの先生の作陶かと判るようになってきた。これぞ自由な作風を許容する京都での展示会なのだと実感する。それにしても、全国から、それぞれ個性ある作品が出展され大いに刺激をうける。京都・やきもの倶楽部は、誠にユニークであり、ご指導を頂く先生方に感謝申し上げながら、倶楽部の発展を願うものである。

私の作品自慢

想いを託す

会員 和田 真理子

私が陶芸を習いたいと思ったのは、今から 15 年前のことです。母の介護も終わり、寂しい思いをしていた頃、大きな病気もしなかった私ですが、手術をすることになりました。入院したのは郊外の大学病院で、窓から見える景色は美しく、近くには小学校があり、子供達の姿が見えました。

術後 2 週間もすると、自然豊かな病院の庭を散歩することが出来るようになりました。よくよく観察してみると、日常何気なく見ているものにも、美しい形や情景等が沢山あり、大切なものが宿っているように思えました。家族のことを思うと、一日でも早く帰りたいかったのですが、仕方ありません。入院中の 2 ヶ月間はたっぷりある時間を楽しみ、心に残ったことをスケッチしておきました。

退院後元気になると、このスケッチしたものを形で表現してみたくくなりました。それには手のぬくもりが伝わる陶芸が良いと思い、教室を探していたところ、京都造形芸大通信学部の美術科に陶芸コースがあることを知り、一度も土に触れたことのない私でしたが、迷わず入学致しました。そこは、人生経験や陶歴・年令も様々に異なる方々との出会いの場でもありました。

学習内容は、自宅で学習するテキスト科目と課題演習、そして、京都の大学でのスクーリングがあり、専門の先生ご指導のもと、轆轤・型・石膏型による成形・手びねり・鋳込等、教えて頂きました。釉薬の調合・焼成などの講義は、よく分からず、ひたすらノートに写していただけですが、それらは今頃になって役立っております。「心を込めて表現する気持ちを大切に、努力を重ねれば、技術は必ずついてきます」との先生のお言葉に励まされ、卒業することができました。あれから 10 年も経っているのに、想いを形にする難しさ、技術の足りなさを感じ、作り直しを繰り返しています。苦勞し、悩むことも多いですが、この過程を続けていくことは私の夢でもあります。

卒業後、水墨画を始めました。書家でもあられる先生は、「墨・紙・筆の味を生かし、描きすぎず、美しい余白を残すこと、技だけでなく、作品に体温を持っているものを描くこと」と教えて下さいます。絵付や、構図・彫りなどに役立てたいと入門したのですが、すべてが陶芸に通じ、とても勉強になっています。

「時を待つ」は、苦手だった轆轤が少し挽けるようになり、陶管作りを楽しんでいた時の作品です。蓋に子供の頃綺麗だと思った氷の文様を描こうと思いました。その時、見入った氷のかげらにある小さな気泡や線は、大地や、空から注ぐ光の様にも見えました。線彫りした後に、片面だけ角度を変化させ、削り取り、つるつるとした手触りに仕上げました。白の陶管は磁土で作ри、本焼後筆先にラスターをほんの少し取り、点々と散らし、雪が降っている様に上絵をしました。一方黒の陶管は、合わせてにマット金と銀の上絵をしたところ、蓋を開けた瞬間金の輪が現れ、月の様に見えました。忙しかった日中も終え、静かな夜の訪れを表現した作品です。これを機に上絵をもっとしたくなり、ユメミルパブリカを作りました。



「時を待つ」
直径 25×高 5.5 (cm)
第 20 回テーブルウェア大賞
オリジナルデザイン部門 入選

今回の京都・やきもの倶楽部作品展に出品したユメミルパブリカは、入院中、タンポポの綿毛が舞い上がり、日を浴びながらひとつひとつがキラキラと輝き、空を旅しているのを見ていた時のことを思い出し、作ってみたものです。このオブジェを作るのにあたり、一番悩んだ所は、穴を開け

るべきかどうかでした。2つ1組の作品で、横に寝かせた方には、どうしても穴を作りたかったのですが、立っている方のパブリカには、先生から講評して頂いた通り、必要なかったと思います。穴を開けたことにより、横から中の空洞が見え、パブリカの張り感や、想いが少なくなってしまうように思えます。



「ユメミルパブリカ」
幅 23×奥 22×高 33 (cm)
幅 23.5×奥 23×高 31 (cm)
京都・やきもの倶楽部作品展 会長賞



「ユメミルパブリカⅡ」
幅 18×奥 15×高 27 (cm)
幅 21×奥 20×高 25 (cm) 他
第 17 回テーブルウェア大賞
オリジナルデザイン部門 入選

「ユメミルパブリカⅡ」として蓋物の器も作ってみました。東京ドームに展示されると、「作品にはお手を触れないで下さい」と表示されているのに、思わず蓋を開ける方がいらして、係の方が困ったそうです。私の家に訪れる子供達もこのパブ

リカに興味を示し、触りたがります。そこで私はびっくりする様に、この中に色とりどりのキャンディーや、金や銀に包まれたチョコレート・小さな小さな金平糖などを入れて、子供達の喜ぶ顔を見て楽しんでおります。

食卓を楽しんでもらえる様な食器や、オブジェを作っておりましたが、口作りの大切さ難しさを実感し、大きな作品でしっかり学びたいと思い、4年程前から大物を作り出しました。

私は実作する前にマケットを作ります。構想を考え自分の想いを形にする作業は、楽しい反面、厳しくなかな表現できず、苦勞することも多いです。形がイメージ出来たら、実作にかかります。小さい作品では、想い描いた形になっていない場合、修正しながら造形出来ますが、大物の時はその都度、形をしっかりと据えていないと、仕上がりが思った様にいかず、又、最初から作り直しになってしまうので大変でした。

大物を作成したので、これを機に卒業後、毎年鑑賞している日本新工芸展に応募してみました。入選して会場に飾られているのを見た時は嬉しかったのですが、暫くすると拙い部分が見えてきて、恥ずかしくなりました。この会では、先生方が会場に飾ってある作品の前で、参加者作品のすべてに講評を下さる日があります。出品していない時は、ただ楽しく鑑賞していただけてですが、この時から、展覧会場は、他の作品のどこがどの様に良いのか、自分に欠けているものは何かと、見て、比べ、考える場となりました。

「抱く」は、京都・やきもの倶楽部作品展に出品した「育む」を約1.3倍に大きく作り直したものです。ほぼ球体ですが、一部に平面があります。曲面から心地よく平面に移り、又曲面に戻りながら形を作る所や、無理なく自然に前後左右の形を変化させることに注意して作りました。一番難しかったのが口の角度のつけ方で、口の中の空間から、自然と外へ流れる感じと、又、場所により、外から中に入り込む角度との繋がりをどうしようかと悩みました。作り直した結果「育む」の時より全体的にゆったりした優しい形になりましたが、口はもう少し小さめの方が良かったと思います。花の蕾をイメージして作ったのですが、夜、家に帰って明かりを灯すと、月の様にも見え心が和みます。



「抱く」
幅 53×奥 50×高 55 (cm)

陶芸を始め、いろいろなものに触れ、興味を持ち、楽しい毎日です。年を重ね、新たに見えてくる美しさ、人の優しさ、生活する中の情景に感動することが多くなりました。こんな日々をととても幸せに感じます。

又、昨年より京都・やきもの倶楽部に入会させて頂き、大変嬉しく思っております。作品展では、先生方より一つ一つ丁寧なご講評や今後の製作に向けてのご助言を頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。独創性豊かな技法・個性的な作品を拝見し、勉強になりました。これからも皆様についていけるよう励んで参ります。どうか宜しくお願い申し上げます。

陶芸技術ノート

ロクロ成形

～発想を変えて～

陶芸家 市川 博一

やきもの倶楽部の作品展、お疲れ様でした。今回は、審査、実演、講評会といろいろ担当させていただきました。皆さん、とても熱心で積極的に取り組んでおられて、私も精一杯取り組ませていただきました。ロクロ実演では、15 cm の輪花鉢と直径 40 cm くらいの大皿、それに、出品していた作品と同種のものを作りました。ここでは最後に作った作品の制作工程について解説いたします。



土をロクロにのせ、何度も叩いて中央に据えます。



土殺しをしっかりと。



中央部を押さえ込み、底まで押し広げます。



底を作ったら円筒形に引き上げます。ここまでは、花瓶などを水引する工程とまったく同じです。



花瓶などを作る場合なら、さらに伸ばして薄く大きくするところですが、私の作品は厚みを残した状態で等間隔に指で押さえしていきます。



口元まで等間隔に。



水引終了。



飛び出した部分をつまんで引っ張り出します。

普段は、この後数日乾燥させて、底や全体を丁寧に削ります。その後は、円盤一段一段を面取り状にカットするなどして、形に変化をつけていきます。段の数や幅、引っ張り出す長さなどを変えることで、さまざまな形を作っています。

本来なら、数日前から別に作って乾燥させたものを用意しておけば良かったのですが、勢いで作品の作り方まで見せましたので、用意がありませんでした。そのため、水引してすぐにカンナで切り取りました。細かいところの仕上げまで説明できませんが、ご了承ください。



最後に口を作ります。



面取りの数をどうするか考え、一段ごとにカットしていきます。もう後戻りはできません。



一段ごとに面取りの向きを変えてカットします。普段は、これくらい削ったら粉だらけです。



終了。

磁器での作品作りを始めた頃、できるだけ土をしめて薄く引くこと、軽くしておくこと、などを気にしながら作っていました。すると、どこにもあるような、誰でもが作るようなものしかできず、あまり仕事を楽しめませんでした。薄くて軽いという磁器のイメージにこだわらず、発想を変えて、別に厚くても良い、重くても良いという気持ちで作り始めたところ、あまり人がやっていない仕事ことができました。

“概念にとらわれずに作る”、いつも心がけているはずなのに、しばしば忘れがちです。概念にとらわれない、発想を変える、と言っても、やきもののセオリーを無視しているわけではありません。「～でなければならない」を「～でなくてもいいんじゃないか」に変えてみたらどうか、ということ。ヒントは、なんでもない目の前に転がっているものだと思います。

枯渇していく原土

「陶芸用粘土のお店」 泉陶料
代表 泉 孝之

私の話を会報「HOMURA」に掲載していただくのはこれで 4 回目になるのだが、『陶芸技術ノート』と言うコーナーにもかかわらず、技術的なお話をほとんどしてこなかったことをこの場を借りてお詫びしたい。言い訳をさせていただくと、技術的なお話や陶土の専門的な事柄は中々一般論ではお伝えしにくく、作陶される中でその都度疑問に思われるような事柄であると思うので、あえて触れて来なかった。しかし、陶土に関する個別の質問は大歓迎なので、是非とも当店までお問い合わせ頂ければと思う。

さて、5 年前にもこのコーナーでお話した我々製土メーカーが頭を悩ませている瀬戸・美濃地方の「原土の枯渇」について、もう一度述べさせて頂くことにする。当社でも、京都では調達できない清水焼の品質に耐えうる良質で豊富なこの地方の原土を使用しているのだが、ここにきてその原土不足が更に加速し始めているのである。5 年前には、私は以下のような話をさせていただいた。

「原土不足」といっても、ただ単に原土が枯渇しているわけではない。蛙目（がいろめ）粘土、木節粘土といった陶土の中心となるものは、今も瀬戸や美濃などには資源として豊富に存在する。では、何が問題なのかというと、「良質な」原土が不足しているのである。われわれが言う良質な原土とは、陶土になったときの「扱いやすさ」はもちろんのこと、繊細な京焼・清水焼の製品に耐えうる「綺麗さ」を兼ね備えている必要がある。また、このようになったのは、

- ・長期にわたる使用による自然減
- ・宅地化による新たな地域の開発が困難
- ・陶器の生産量の減少に伴う原土の採掘業者の収益悪化や高齢化、
- ・後継者不足による廃業が原因で原土が採掘されない

などが理由であろう。

作品展に初めて参加して

会員 玄 平

このお話しをした当時では、不足していたものは「良質な」原土だけであった。しかしながら、今では「原土の枯渇」はさらに深刻になり、良質なものはおろか、原土そのものが無くなりつつあるのだ。大量生産・大量消費の時代が終わり、瀬戸物・美濃焼の需要は激減しているが、その灯が完全に消えたわけではない。一体なぜだろうか。

愛知県瀬戸市では 2013 年頃より原土の枯渇により価格が上昇し続けている。その上に、供給量を使用実績に応じて制限するという事態にまで発展した。昨今の宅地化や工業用地化で採掘できる場所がほとんどなく、やむをえない処置である。最近、新たな鉱山の候補地が見つかったが、開発・採掘には莫大な費用と時間がかかるうえ、採掘が出来るのは 7~8 年後だという。

また、時を同じくして岐阜県多治見市でも原土が眠る鉱山を閉山した上で、工業用地として整備し、企業を誘致する方針を示した。この鉱山については行政との話し合いにより残りの原土を採掘し、移転できるように話を進めているようだが、今後もこのような事態が頻発するだろう。

陶磁器産業が衰退し鉱山での原土採掘も採算が厳しくなっていくなか、一方では名古屋通勤圏のベッドタウンや企業の物流・製造拠点として広大な鉱山を多数有するこの地域は非常に良い立地であるとともに、鉱山の所有者も採掘事業をするよりも何倍、何十倍も良い条件で借り手がつくため、それにより「閉山」すなわち「原土の枯渇」へと進んでゆく。有るのに採掘できないという負のスパイラルになっているのである。このような事態を受け、ここ数年、美濃地方の行政機関でも資源保全の動きが出てきている。行政と陶磁器関連業者が協力し、将来の供給量を割り出した上で、原土をストックしていくという計画である。あわせて「美濃焼」の再ブランド化を模索し、産業として安定させるという事にも力を入れて取り組んでいる。

我々製土メーカーも岐路に立たされている。天然の資源を利用している以上、いつかは枯渇するという覚悟はできているが、外部要因によって予想より早く進行している。ただ言えることは、この大きな流れは変わらないということ、そして我々メーカーはその変化に対応できる技術力を身につける必要があるということである。

第 2 回京都・やきもの倶楽部作品展はやきもののメッカ、清水団地の真新しい「清水焼の郷会館」で開催された。昨年の会場とは趣の異なった開放的な空間で、なにより展示什器が良く、作品が十分な光量を得て大いに映えていた。アクセス面の若干の不利は、作品展前に開催された「清水焼の郷まつり」の賑わいを見れば、事前告知と総合的な集客力という点に課題を残したかもしれない。

今回の作品展の出品作品は、やきものという大きな括りの中で、それぞれに実験的で個性にあふれていた。用の美を追求したもの、形の魅力を求めた作品、土と火のせめぎ合いの中から生まれた作品、あるいは絵画的技法による美しさや精緻な手法に主張を込めた作品など、それらは恰も火焰の先が四方に向かうように、それぞれに情熱が叫びとなって拡がっていた。やきものという箱を開けたら色んなモノが出てきたような、オモチャ箱的オモシロサと言えるだろうか。そこには独奏とは違った合奏の調和の心地よさと楽しいオドロキがあるように思えた。

講評会は最終日の午後に、森田会長の進行のもと谷口正典理事、市川博一理事を講師として招請して開催された。受賞作の選考の経緯が説明された後、受賞作品から順に一点ずつ作者のコメントと講師の講評が展開され、出席者には充実した時間となった。「失敗はどんどんして下さい。そこから良い作品が生まれます！」という言葉は創作活動に取り組む者にとって心強いサポートになったと思う。工芸において、その制作技法を作品の生命線とする事も多くあり、化学実験のように何度もチャレンジして失敗を繰り返し、やがて掴んだものはかけがいのないものだと思う。講評会と併せて会員同志の合評会が活発に持たれば、更に充実した倶楽部になるように感じた。

イメージ通りの仕上がりを追求することと、やきものにおける偶然性、窯変や火変わりの妙味は

一見すると相反する要素だが、多くの経験値と豊かな感性や洞察力が、読み込みという中でイメージと結びついて行く。そしてそれが人為的というササクレ感を払拭してくれると言う事ではないかと思う。

第1回作品展はそれぞれに完成度が高く会員各位の意気込みがパワーとなって作品レベルを高いものにしていたように感じました。小生、今回初めて出品させて戴きました。協奏曲のハーモニーを乱さないかと案じつつ制作しましたが果たして……。

この作品展が個人の中でどのように位置付けられているか興味深いところですが、自身の実力査定、若しくは制作活動の方向性を確かめたいという思いからの出品もあるだろうと思います。会員の創作活動のモチベーションを上げる大きな力となるよう開催を望むものですが、回を重ねる毎に、やがて伝統工芸美を究める部門と創作アートとしてのやきもの部門が双頭を誇る展覧会として発展することを祈念して止みません。

表彰式では受賞された方々の謙虚でスマートな受賞コメントに奥ゆかしさを感じ、広域に会員をもつ当倶楽部の特性に魅力とさわやかさを感じながら、和気あいあいの懇親会の席を後にしました。



第2回作品展 風景

活動報告

第2回 作品展を開催

開催日：平成26年10月22日～10月26日

京都市山科区の清水焼団地内「清水焼の郷会館」で第2回京都・やきもの倶楽部作品展が開催されました。今回は、この期間中に特別企画として「お茶席」と「陶芸実演」のイベントが催され、最後は前回と同様、講評会に続いて表彰式・懇親会で締めくくられました。これらの詳細については、「倶楽部だより No.5」に掲載されています。また、本「会報17号」の投稿文の中にも作品展に関連した内容が盛り込まれています。

作品展に展示された全作品は、作品展終了後に発行された図録「京都・やきもの倶楽部作品展『炎』HOMURA」に収録されています。

■ 作品展

作品を出品された方は会員27名、賛助出品者8名で、作品数にして全部で58点が集まりました。今回の作品展会場は、建設されて間もない建物で、内装も真新しく、1階にある展示室の一面は全部ガラス戸で作られており、明るく快適な空間を生み出していました。交通の便が良くないという心配はありましたが、会期を通して242名の方々にご来場いただくことができました。



会場風景 右側のガラス戸から入る日の光が場内を明るくしている。

■ お茶席

会館の2階には茶室が設けられており、ここでお薄のお手前が行われました。出席者数は全部で26名となり、何組かに分かれてお茶を楽しめました。お茶席の準備には会員の二場寛治様にご協力をいただきました。



お茶席風景　一服いただきます。

■ 陶芸実演

会館1階にある多目的ホールでは、陶芸家、市川博一理事による磁土を用いた電動ロクロの実演が行われました。作りながらの説明とともにその合間の質問にも答え、見事な指裁きで見る見るうちに作品が出来上がる様子は、本当に見事でした。この実演・講習には11名の会員が参加され、どなたも熱心に見入っておられました。



制作を終えて、一服する間もなく、質問責めです。

■ 講評会

作品展会場の最後には、陶芸家、谷口正典理事、市川博一理事による講評が行われました。その場に居た会員のすべての作品について、心のこもっ

た評価をしていただき、出品者全員が真剣な表情でお二人の話に耳を傾けていました。講評会にはおよそ16名の会員が参加しました。



全員の目が作品に集中しています。中央に腰掛けて講評されているのが谷口理事で、腰痛を押してのご出席でした。

■ 表彰式・懇親会

陶芸実演の終わった多目的ホールで食事と飲み物が準備されたテーブルを前に懇親会が始まりました。森田会長のごあいさつの後、受賞された6名の方々に森田会長、寺池副会長から表彰状とトロフィーが送られました。乾杯の後、受賞者の喜びの声や出席者からの陶芸への色々な想いを伺いながら、宴は和気あいあいと進められ、第2回京都・やきもの倶楽部作品展の幕は閉じられました。



祝宴はにわか作りのテーブルを囲んで、まずは乾杯からスタートいたしました。

平成 27 年度総会を開催

開催日：平成 27 年 2 月 28 日

「清水焼の郷会館」で平成 27 年度総会が開催され、それに併せて作品講評会と懇親会も催されました。この総会は、本来ホテルグランヴィア京都において行う予定になっていましたが、出席者数が少なかったために、開催場所を「清水焼の郷会館」に移して開催されることになりました。

総会・作品講評会・懇親会の様子については平成 27 年 3 月 15 日発行の「倶楽部だより No.6」に詳しいので、そちらをご覧ください。また、総会への出席者は役員・理事 7 名、会員 9 名で、委任状は 25 名でした。

会員便り

個展・グループ展・公募展

(平成 26 年 10 月 ～ 平成 27 年 3 月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、機関誌「倶楽部だより」に掲載されたものをまとめています。会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、「倶楽部だより」に添付されている展覧会情報掲載申込書をご利用下さい。

平成 26 年

■ 9 月 20 日 ～ 10 月 5 日

かさまアマチュア陶芸大賞 2014

茨城県陶芸美術館 2F 県民ギャラリー
(茨城県 笠間市)

稲垣 薫 (入選)

■ 10 月 22 日 ～ 10 月 26 日

第 2 回 京都・やきもの倶楽部 作品展

清水焼の郷会館 (京都市)

京都・やきもの倶楽部 主催

■ 10 月 29 日 ～ 11 月 3 日

創造美術会 陶芸部 静岡県支部

第 4 回 陶芸展

天神蔵ギャラリー (浜松市)

荒川 明

■ 11 月 12 日 ～ 11 月 17 日

うま' S 展

イロリムラ (大阪市)

森田 隆司

■ 11 月 12 日 ～ 11 月 17 日

陶和会 作陶展

飛鳥画廊 (神奈川県 小田原市)

安部 邦子

■ 11 月 18 日 ～ 11 月 23 日

吉田 貢 作陶展 ～ 穴窯の世界 ～

グイツイングallery 宇 (千葉県 松戸市)

吉田 貢

■ 11 月 20 日 ～ 11 月 24 日

第 26 回 工芸美術 創工会展

京都文化博物館 (京都市)

市川 博一、加藤 丈尋

■ 11 月 20 日 ～ 11 月 26 日

松谷 文生 陶展 ― 観 ―

福屋八丁堀本店 7 階美術画廊 (広島市)

松谷 文生

■ 11 月 25 日 ～ 11 月 30 日

綾土塾 Ceramics Exhibition 3

ギャリエヤマシタ 2 号館 2 階 (京都市)

寺西 健二、吉田 貢

■ 12 月 13 日 ～ 1 月 18 日

改組新第 1 回日展 京都展

京都市美術館 (京都市)

市川 博一 (入選)、谷口 正典 (入選)、

森田 隆司 (入選)

平成 27 年

■ 1 月 6 日 ～ 1 月 11 日

そうび展 II 期

精華町役場内 交流ホール

(京都府 相楽郡)

稲垣 薫

■ 1月10日～2月1日

第1回 藝文京展

京都芸術センター（京都市）

片岡 俊彦（入選）

■ 2月1日～2月27日

宮崎まさのり 切り絵象嵌陶展

芦屋市立病院ギャラリー（兵庫県 芦屋市）

宮崎 正制

■ 2月7日～2月15日

大亦みゆき 陶の絵 展

ワイ アート ギャラリー（大阪市）

大亦 みゆき

■ 3月25日～3月31日

— 土の彩 — 陶・今井眞正展 東京展

高島屋日本橋店 6階 美術画廊

（東京都 中央区）

今井 眞正

凡例

■ 開催期間

展覧会名

展覧会場（開催地）

出品者名（入選、入賞）

編集後記

昨年度から編集委員会が発足し、それに併せて改訂「会報 HOMURA」と「倶楽部だより」がスタートしました。早くも1年が過ぎ去り、新しい会報は、この17号で3回目の発行となります。編集委員会は森田委員長を中心にして、途中、交代もありましたが、稲垣、片岡、佐武、曾根の4名が委員として関わってきました。編集にあたっては、各会誌の各号に対して、編集委員1名が編集責任者として取材から校了までを受け持つこととし、その過程で編集委員会の全員が記事に目を通して、添削、校正に当たって来ました。このように、それぞれの目標に対して責任者を一人決めるというやり方は、非常に巧く機能しており、分担してものごとを進める際に必要なことだと実感しています。作品展の実行委員会や倶楽部の運営委員会においても円滑な運営のために考えてみては如何でしょうか。

2月の末に開催されました平成27年度総会において森田会長が退任されることが決まりました。森田会長には、在任中の3年間、会員が積極的に参加できるやきもの倶楽部を目指して、作品展の開催、運営委員会の設置、編集委員会の設置にご尽力いただきました。そのお陰で倶楽部の活性化が達成され、会員同士の交流が盛んになってきました。感謝しております。一方で、これらを維持するためには、いずれも会員各位の努力が必要であり、このことに、これからのやきもの倶楽部の命運が掛かっています。編集委員の一人として作陶の将来を見据え、希望に満ちた会誌にしていきたいと思っていますので、皆様どうぞご協力の程、お願い申し上げます。

（編集委員 片岡俊彦）

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)